

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
初志を貫徹できる人 「成功するまでやれば、成功する」法則

志を貫くということは、「計画を貫く」ことではありません。事前の計画をそっくりそのまま形にすることが、志を貫くことではないのです。多くの人が、このところを勘違いしています。大切なのは「実行し結果を出す」ことです。計画通りに進めることはできなくても、志したものが出来上がればいいのです。つまり、実行段階の途中で修正や変更があっても、最終的に目的のものが完成するなら構わないのです。

何か計画を実行すると、必ず途中で修正や変更が出てきます。これは当たり前のことで、その変化に対して臨機応変に対応できるのが仕事ができる人なのです。たとえば、政治家と官僚の構図にもこれは当てはまります。頼りなく思える日本の政治家たちも、たまには正しいことをいうものです。しかし、そういう場合でも官僚は抵抗勢力として行く手を阻もうとします。だからといって、「抵抗に遭って進歩できない」というのでは、志が折れてしまうことになる—つまり、初志貫徹できなくなります。それなら、計画のレベルを一段階落として、当初の計画の 60 パーセントくらいまでしか達成しないものを目標に修正しても構いません。なぜなら、60 パーセントくらいのところまで実行してみれば、その先の 40 パーセントもやらなければならないことを、みんな理解し始めます。もともとの志が正しいことが時間とともにわかります。ですから最終的には、志すレベルにまで達することができるはずなのです。これが正しい「初志貫徹」です。最初から闇雲に志を全うしようとするのが初志貫徹ではありません。とりあえずは六割くらい正しければいいというくらいの形で考え、進めておいて、その裏ではあくまでも志をあきらめず、粛々と最後まで持っていけばいいのです。

「成功するまでやれば、成功します」私はいつもこのことをいっていますが、真理だと思います。そして「初志貫徹」するための手段として、一流の社員や真のリーダーが必ず兼ね備えておかなければいけないものが、実は「臨機応変さ」なのです。「君子豹変す」という言葉がありますが、立派な人物ほど、自分の誤りに気づいたらきっぱりと言動を変えることができるのです。私はよく社内で、「豹変していれば君子になれるかもしれないぞ」と部下にっていました。正しく英訳するとややこしいので、わかりやすく「タイガーチェンジ(Tiger Change)」と独自に訳して、この言葉で社員にハッパをかけたものです。

「六割正しい」と判断して物事を先に進めていくと、その間にも新しい情報がいろいろと入ってきますから、ときには「実は正しくなかった」「もっといい方法があった」と気づく場合もあります。もし「今のままではダメだ」となったら、そのとき変えればいいのです。今のやり方を変えようとする「なぜ変えるんだ？」と周囲から不満が出てくることもあるでしょう。本来なら、上司も部下も、みんなが同じ情報を把握していれば、変えざるを得ない理由もわかりますから、文句も出ません。しかし、いくら新情報が出てきてもその段階で突然変更するには格好がつかないときに、物事をいい方向に進めるには、リーダーが「タイガーチェンジ」できるかどうかにかかってきます。それは情報がすべて共有化できていれば、その変更の意味にも自ずと理解が得られるはずだからです。豹変して反発されても結果はついてきますから、最終的には周りからの応援や協力を得ることができます。それこそが重要です。途中がどうあれ、仕事は結果がすべてなのです。初志貫徹できることと、臨機応変に動けることは相反しません。初志貫徹するために臨機応変さを発揮できる—。これが一流のリーダーであり、若い人に目指してほしい一流のビジネスマン像です。

一流のビジネスマン像は、なんだと言っていますか？

()